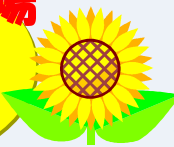


まなびの広場
稲進会
教室通信



彩色いろいろ

「1015歳の男②」

「お前、わしが嘘をついていると思っておるだろ」老人は、顔を近づけ鋭い目つきを僕に向けてきた。

「いえ、べつに」僕は、心を読まれた動揺を隠せなかった。

「まあ、信じられないのも無理はない」そう言って、老人は、腰に巻きつけられた紐にぶら下がっている巾着のようなものの中を探った。「ほれ見ろ」一枚のカードをテーブルの上に置いた。車の免許証だった。しかもゴールドだった。免許証には、『長徳4年3月3日』という文字が生年月日の項目に書かれていた。

「長徳って……」僕は、書かれている元号に目を疑った。

「長年国家の機密事項、つまりスパイとして、世間に身をさらすことを禁じられた一族じゃからな。東西冷戦が終わり、ようやくわしらも、堂々と街を歩けるようになった。それにな、世の中には、お前たちが信じられないようなことはゴマンとあるんだ」

「そうなんだ……」僕は、なんとなく老人の存在を認めつつあった。

「では、コーヒー代の代わりになるような話しを始めるとするか」

老人は、僕のアイスコーヒーのグラスに手を伸ばし、勝手にゴクリと美味そうに飲んだ。

「お前たちの時代はいちばん大変なのかもしれんな。そして最も不幸な時代なのかもしれん」

「えっ！？今が一番不幸な時代？」

「ああ、そうじゃ」

「でも、もっと生活そのものが大変で、不幸に思える時代もたくさんあったんじゃ」僕は、今日の予備校で受けた日本史の授業のことを思い出していた。戦争や飢饉、身分差別……、どれも現代では予想もつかないことだ。

「じゃあ一つ質問だ。お前、今幸せか、それとも不幸か？」

「そう聞かれると、どちらかと言えば『不幸』かな」

「なぜだ？」

「受験勉強しなくちゃならないからかな」

「受験勉強するのは、不幸なのか？」

「だって、つまんないし、何のためにしなくちゃいけないのかよくわかんないし。大学に行くためについてことで自分の時間を犠牲にしているのを幸せとは思えない」

「多くの受験勉強をしている若者たちは、同じような気持ちでいるんだろうな。でも、多くのお前たちと同じ年代の者にとって、勉強できることが、めっちゃくちゃ楽しく、そして幸せに感じている時代があったんだぞ」

「わしが850歳の頃だ。江戸に『適塾』という塾があった。ある時、わしは昼飯に食った生魚にあたって食中毒になった。駆け込んだ診療所にいたのが、緒方洪庵先生だった。それ以降、親しくなり先生の塾である適塾の見学をさせてもらったんだ。そこに通う生徒たちは、寸暇を惜しまず勉強していた。環境は決して恵まれたものでは無かった。当時多くの者が学んでいた蘭学(オランダ語)の辞書は、塾内に一冊しかなかった。だから、夜通しその一冊の辞書を順番に使って調べ物をしていた。しかも大部屋に雑魚寝、足や腹を踏んだり踏まれたり。でもみんな楽しそうに学んでいた。それにあれじゃ、お前も名前ぐらいは知っておるだろ、『二宮金次郎』君。彼は、本を読む時間があつたらその分働け、というわけで家では勉強させてもらえなかった。だから、薪を背負って運ぶ道中に本を読んで勉強したんだ。勉強したくても環境が整っていない、あるいはしてはいけない。そんな風に言われている時の方が、人は勉強を心から楽しんで行っていた。今は、逆だな。他のことはしなくていいから、勉強しなさい、と言われる。教材も無数に揃っている、一人ひとりに必要なほどまでにだ。インターネットを利用していつでも何でも調べられる。そうだろ」

「確かに」僕は、自分の環境を考えてみた。

「でも、多くの者が、勉強することを不幸と考えている。皮肉なことだな」

(つづく)

教室の風景

あのね、うんとね(^o^)♪は成長のチャンス！！

レッスンの最後に発表の時間があるのは、自分の考えを言葉にして伝える練習のためです。でも発表の場になるとなかなか言葉が出てこないということがよくあります。もっと色々な言葉を聞きたいけれど、「発表」と言われると多くの子どもたちが緊張してしまいます。

とりあえず今は話す内容よりも「発表する」行為そのものを習慣としていくことに意味があると思っています。

これがもし製作中だったらどうでしょうか？「～ながら」の効果でみんなリラックスして話してくれます。会話という視点でみたら、この雑談の方が効果的かもしれません。特に小さい子は「あのね、うんとね」と言いながら一生懸命に話してくれます。まだまだ言いたいことが頭に浮かんでも、それを言葉にするためには時間がかかる年齢の子どもたち。レッスン中だからといって先を急いだりしないように気を付けています。今、この場面で焦って作品を完成させるよりも、子ども自身が自分の言葉で話してくれるのをじっと待ってあげることの方が、自分の考えをきちんとと言える子になるために必要なことですし、それがその子と私の信頼関係にもつながっていくと思うからです。

年中さんの男の子が、その子なりの感性で質問を投げかけてくれた出来事を紹介します。レッスンの後、低いテーブルを挟んで立っていたその子と私。私は、お母さんと立ち話をしていたのですが、その子が身を乗り出して私の足元を見るんです。どうしたのか聞いてみると「お椅子に乗ってなくても、そんなに高いの？」ですって。なんて純粹でかわいらしい疑問でしょう。いつも並んで椅子に座っていたり、私がしゃがんで目線を合わせた状態でいたので不思議な感じがしたのかもしれません。そのひと言がいつもの発表のときと感じが違うなあということに感心しました。

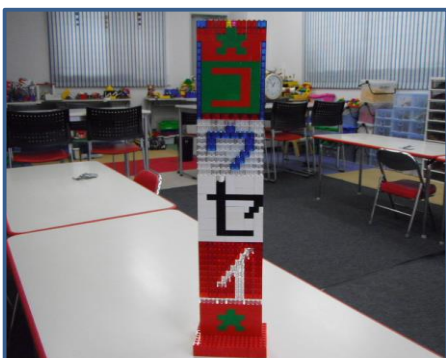
目の付けどころがオモシロイ！！

これからもより子どもたちの力を十分に引き出してあげられるようなかかわり方ができるように、勉強を続け経験を重ねていけたらと思っています。



インストラクター 清水 倫子

今月の作品紹介



☆看板☆

自分の名前を看板にしてみました♪
後ろから光を当てると、透明ブロックのところがきれいに光ります！！



☆カブトムシカー☆

カブトムシが乗り物に変身ー！！
羽の模様にもこだわって作りました。



☆飛行機☆

プロペラもエンジンも飛行機さながら！
左右と前後のバランスもしっかり意識できていますね♪見張り役？
各持ち場でスタンバイ！